長野県ヤングケアラー実態調査結果報告書【概要版】
～中野市内の小中学生の状況～

2023 年１月

中野市子ども部子ども相談室

1　調査概要

⑴　調査目的

「長野県ヤングケアラー実態調査」は、県内の児童生徒における家族の世話の状況や、それに伴う日常生活への支障、支援のニーズ等を把握し、ヤングケアラーの早期把握と必要な支援を行うため県において実施。

本報告書は、県の調査結果のうち、県から情報提供のあった中野市内の小中学生の状況をまとめたものです。

⑵　調査対象

県全体

児童・生徒	対象者数	回答者数（回答率）
①小学５・６年生	約 35,000 名	31,378 名（約 89.7%）
②中学生	約 54,900 名	44,800 名（約 81.6%）

中野市

児童・生徒	対象者数	回答者数（回答率）
①小学５・６年生	735 名	571 名（77.7%）
②中学生	1,109 名	884 名（79.7%）

⑶　調査手法

各学校を通じて調査概要を配布。無記名式のアンケート調査でＷＥＢ環境から任意で回答

⑷　調査期間

令和４年９月１日～令和４年 10 月 25 日

【本調査におけるヤングケアラーの定義】

本調査におけるヤングケアラーとは、「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話を日常的に行っていることにより、子ども自身がやりたいことができないなど、子どもの権利が守られていないと思われる子ども」をいう。

２　調査結果

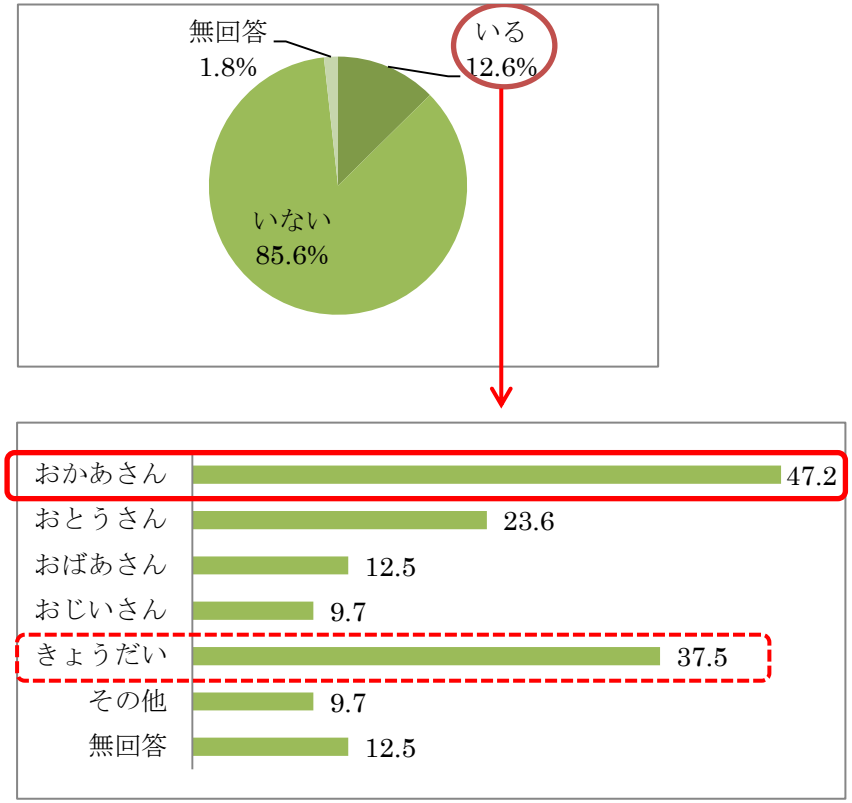
⑴　お世話をしている人の有無とその家族

お世話をしている家族が「いる」と回答したのは、小学生で 12.6%、中学生で 6.7%であった。

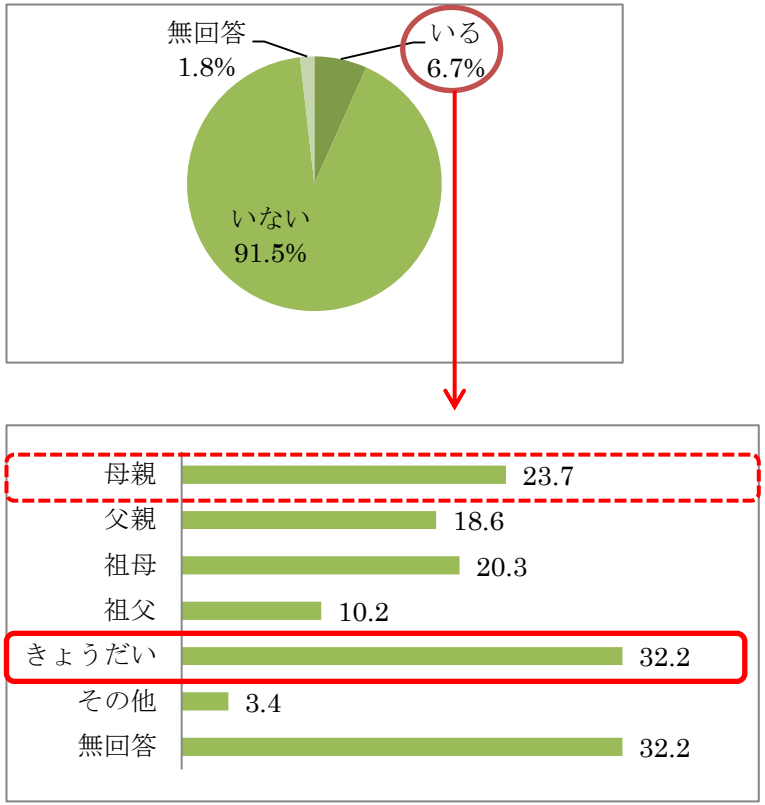
お世話をしている家族のうち最も多いのは、小学生では「おかあさん」、中学生では「きょうだい」であった。

県全体では「いる」と回答したのが、小学生で 11.6%、中学生で 6.3%であり、お世話をしている家族のうち、小中学生とも「きょうだい」が一番多かった。

【小学生】



【中学生】

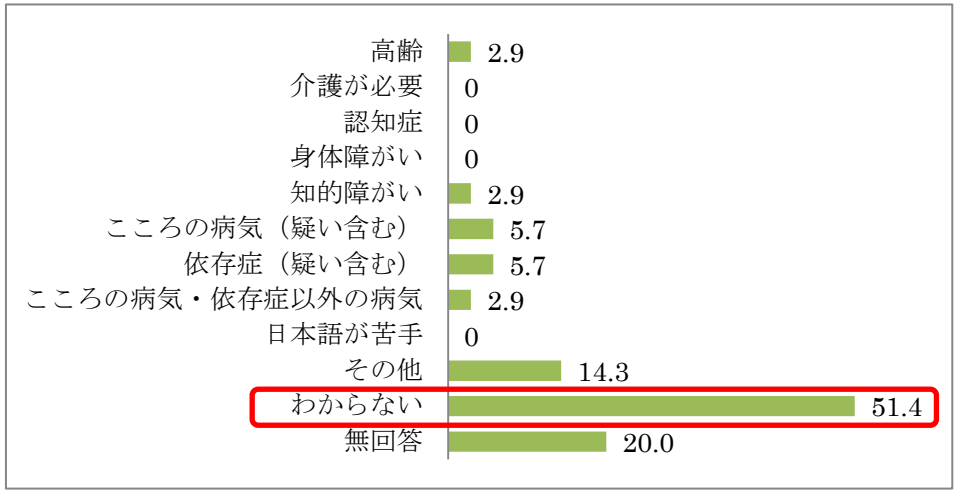


⑵　お世話をしている家族の状況（小学生）

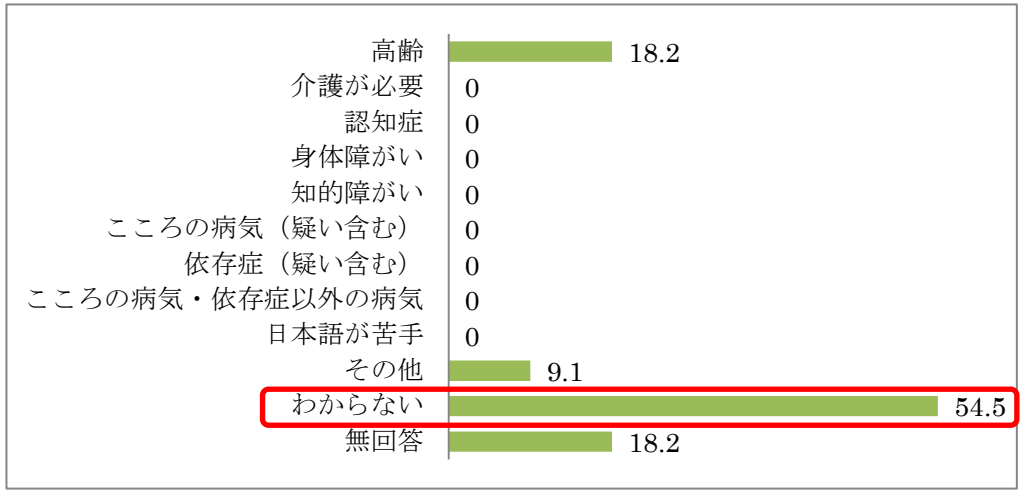
〇お世話をしている家族が「いる」と回答した小学生にお世話をしている家族の状況について質問

〇父母、祖父母では「わからない」、きょうだいでは「幼い」が最も多かった。

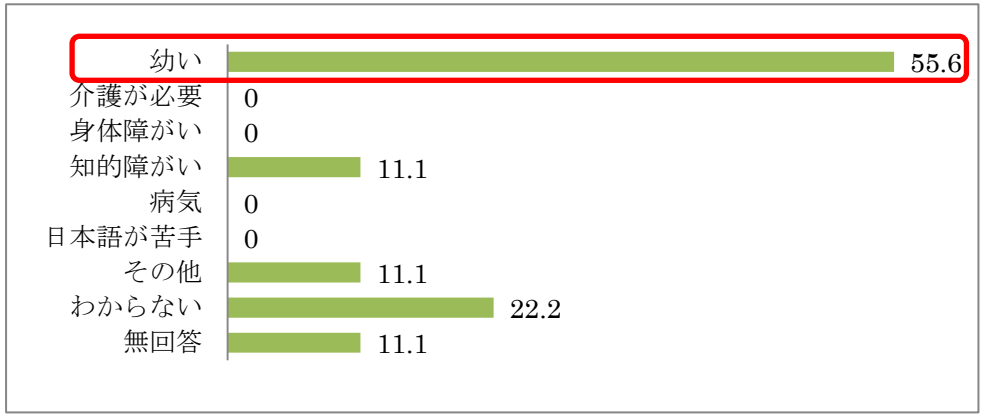
【小学生】（父母）



【小学生】（祖父母）



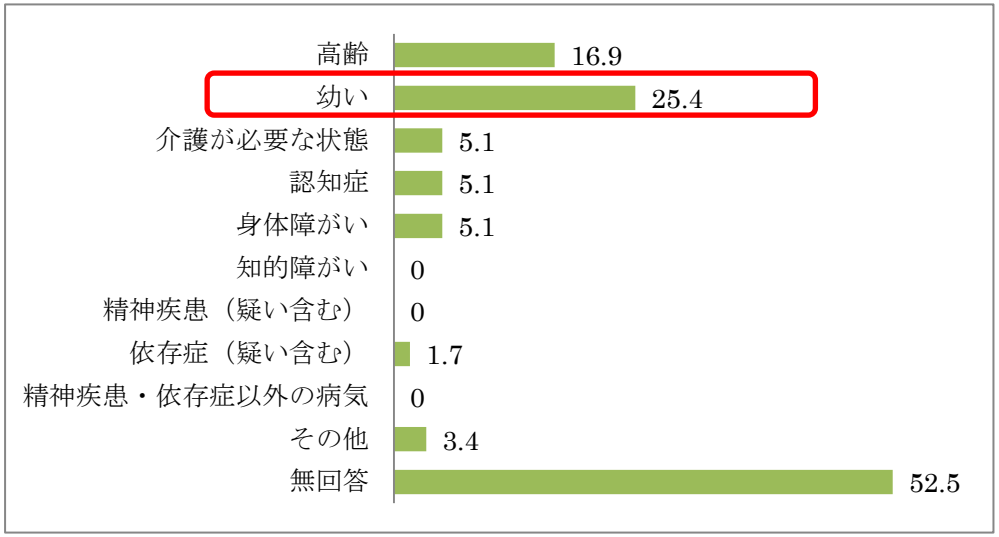
【小学生】（きょうだい）



⑵　お世話をしている家族の状況（中学生）

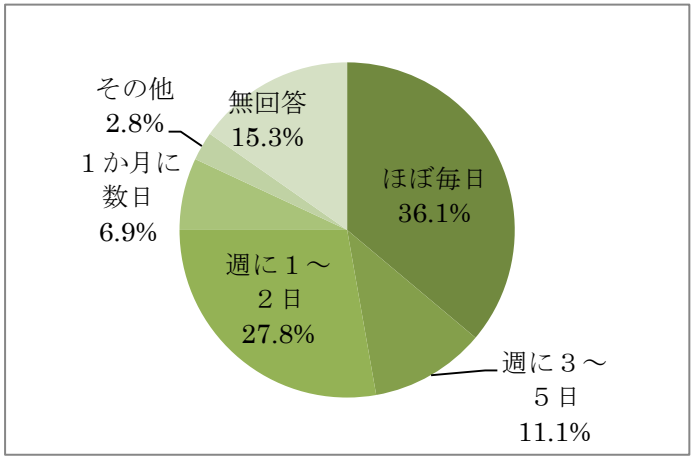
〇お世話をしている家族が「いる」と回答した中学生にお世話をしている家族の状況について質問

〇無回答が一番多く、次いで「幼い」「高齢」であった。

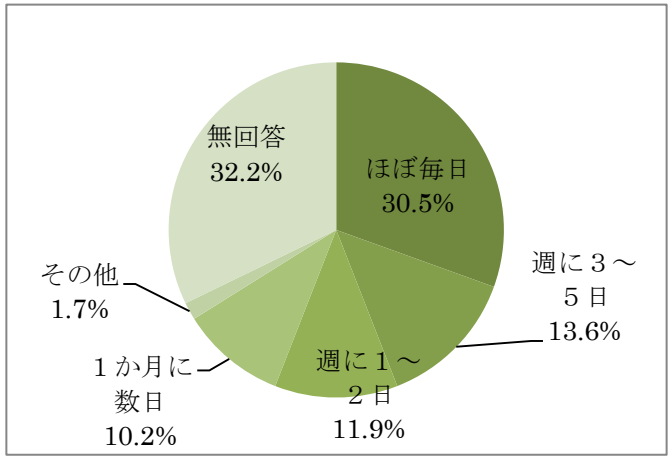


⑶　お世話の頻度

【小学生】



【中学生】



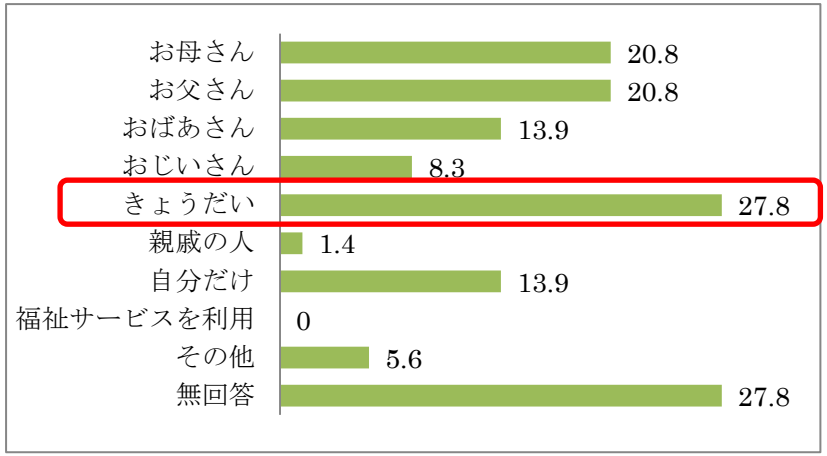
〇小中学生いずれも「ほぼ毎日」が最も多くなっている。

⑷　お世話を一緒にしている人

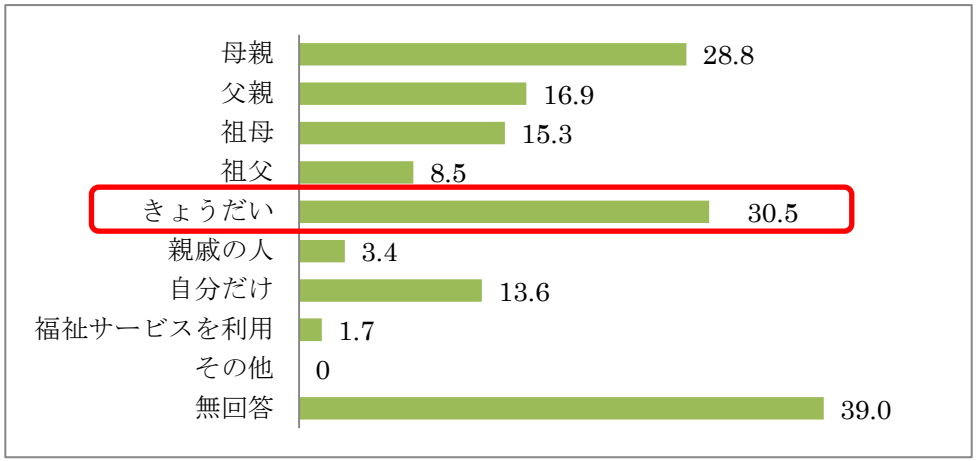
〇お世話をしている家族が「いる」との回答者に、誰と一緒にお世話をしているかについて質問

〇県全体では、いずれも「母親」が多かったが、中野市では「きょうだい」が最も多かった。

【小学生】



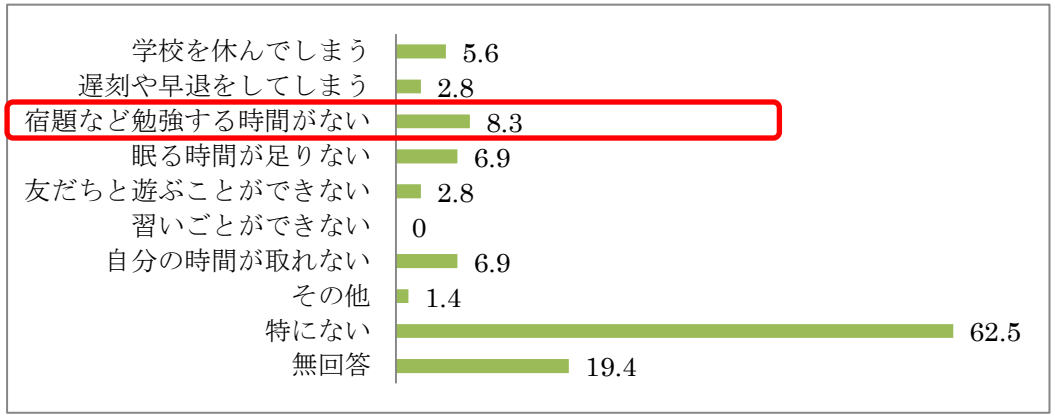
【中学生】



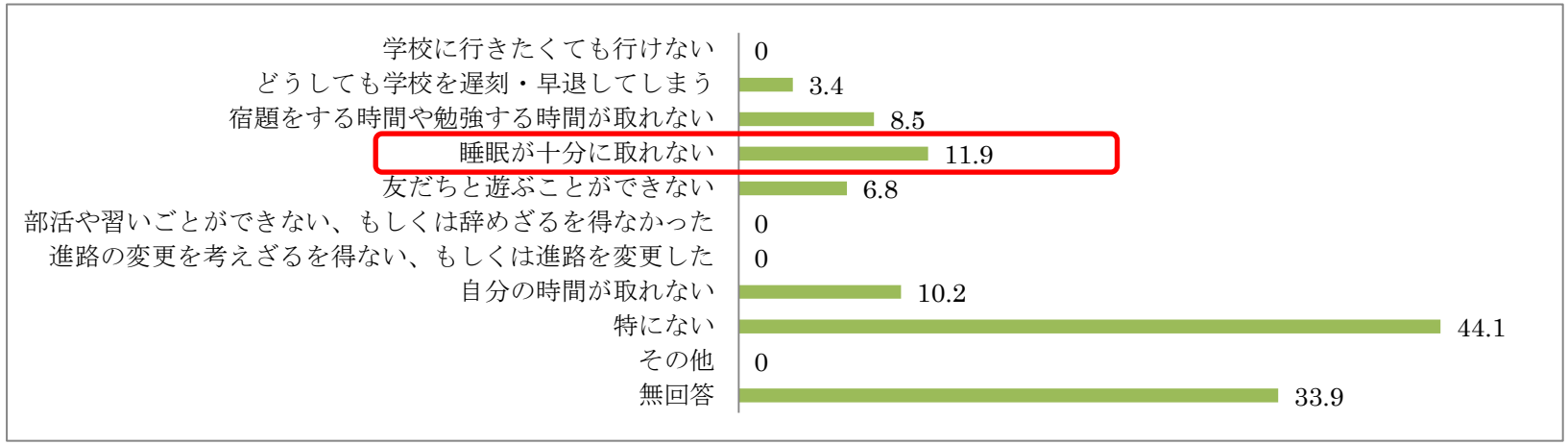
⑸　お世話をしていることによる家や学校での生活に対する影響

〇お世話による影響としては、「特にない」が最も多いが、次いで、小学生では「宿題など勉強する時間がない」、中学生では「睡眠が十分に取れない」であった。

【小学生】



【中学生】

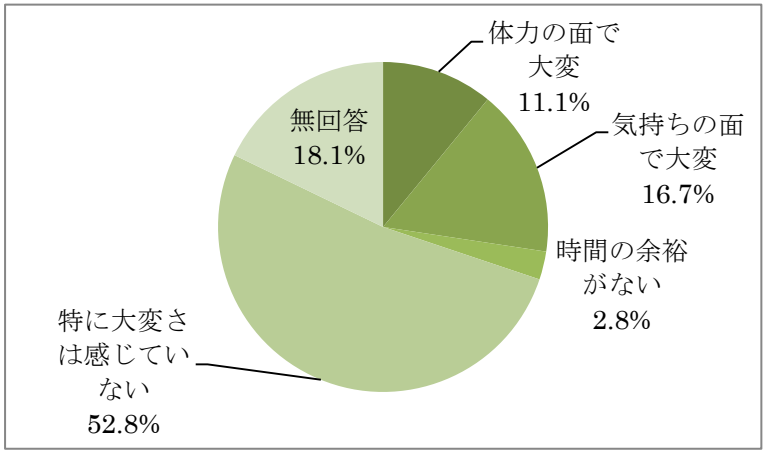


⑹　お世話をすることの大変さ

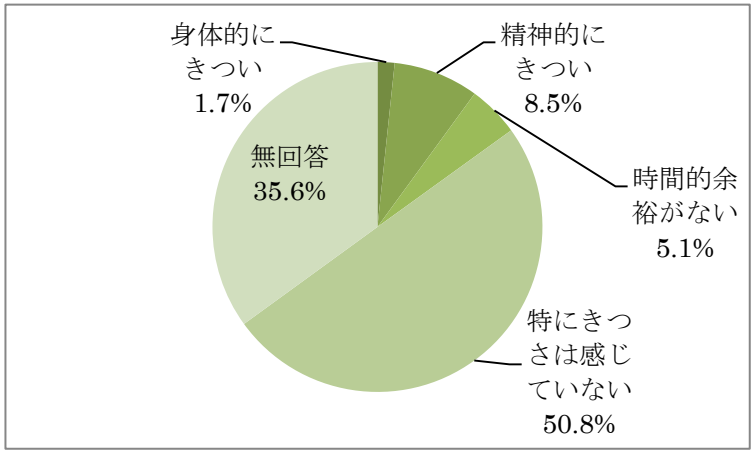
〇お世話をしている家族が「いる」との回答者に、お世話をすることに大変さを感じているかについて質問

〇「特に大変さ（きつさ）は感じていない」が最も多いが、次いで、小学生では「気持ちの面で大変」中学生では「精神的にきつい」が多かった。気持ちの面での負担を感じている児童生徒が多い。

【小学生】



【中学生】

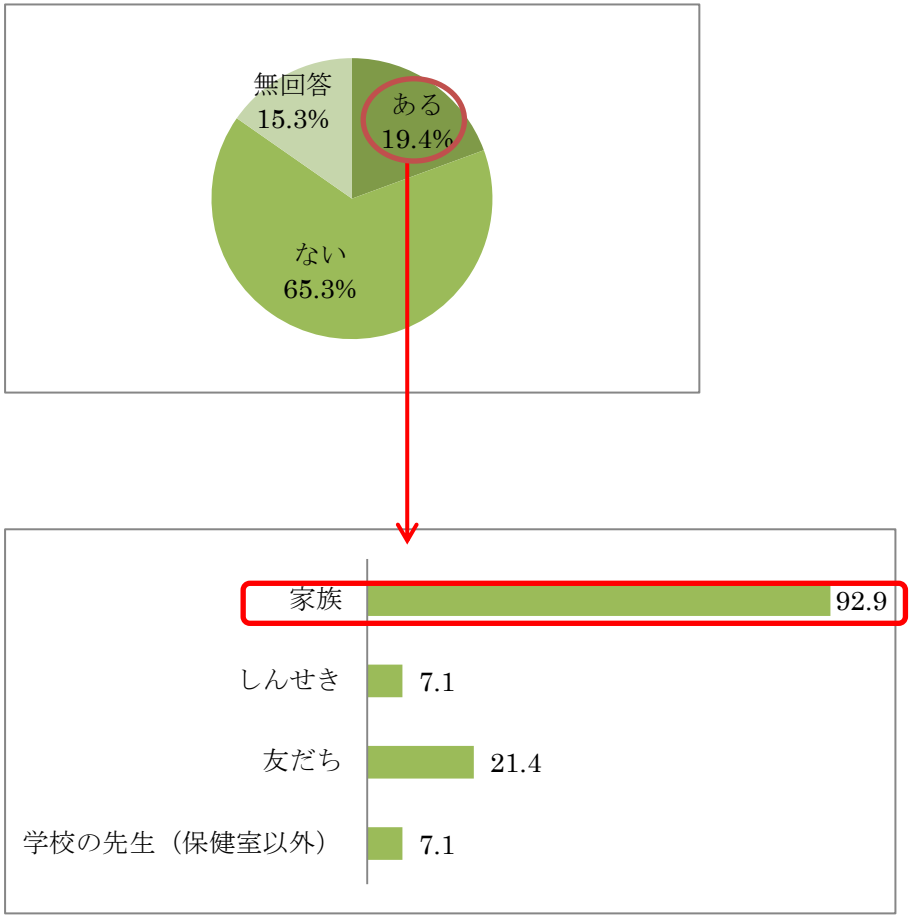


⑺　①相談したことの有無（相談相手）

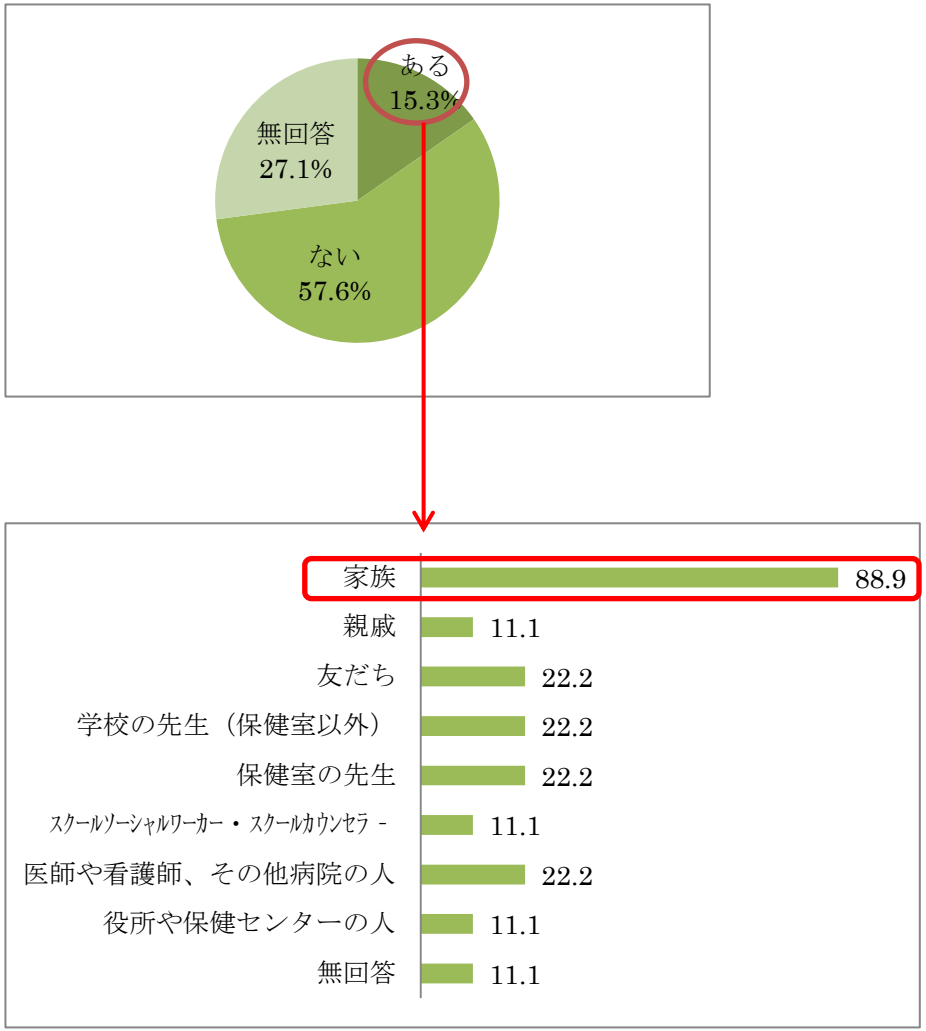
〇お世話をしている家族が「いる」との回答者に、お世話をしている家族のことや悩みを相談したことがあるかについて質問

〇いずれの年齢も「ない」が最も多かったが、「ある」の場合の相談相手は「家族」が最も多かった。また「ない」場合の理由としては、いずれも「相談するほどの悩みではないから」が最も多かった。

【小学生】

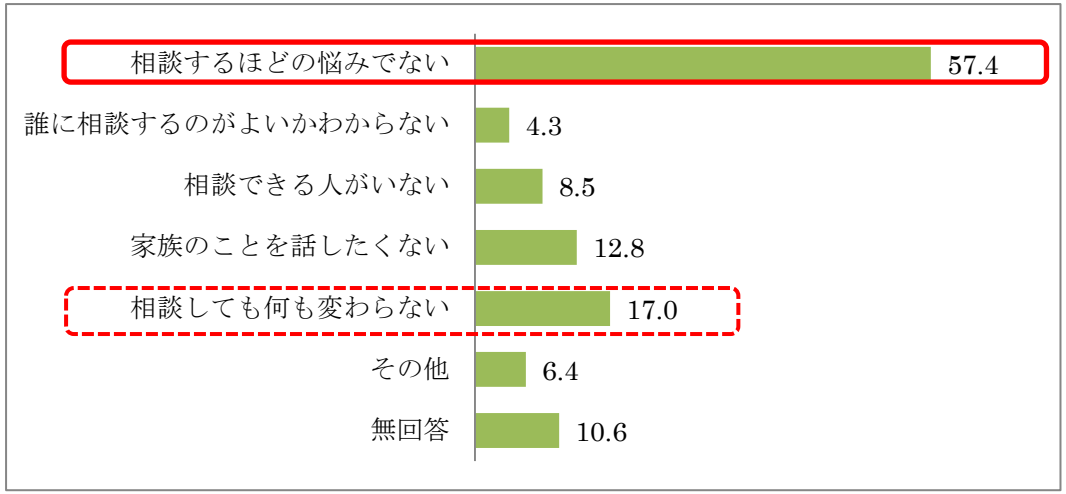


【中学生】



②相談したことの有無（相談していない理由）

【小学生】



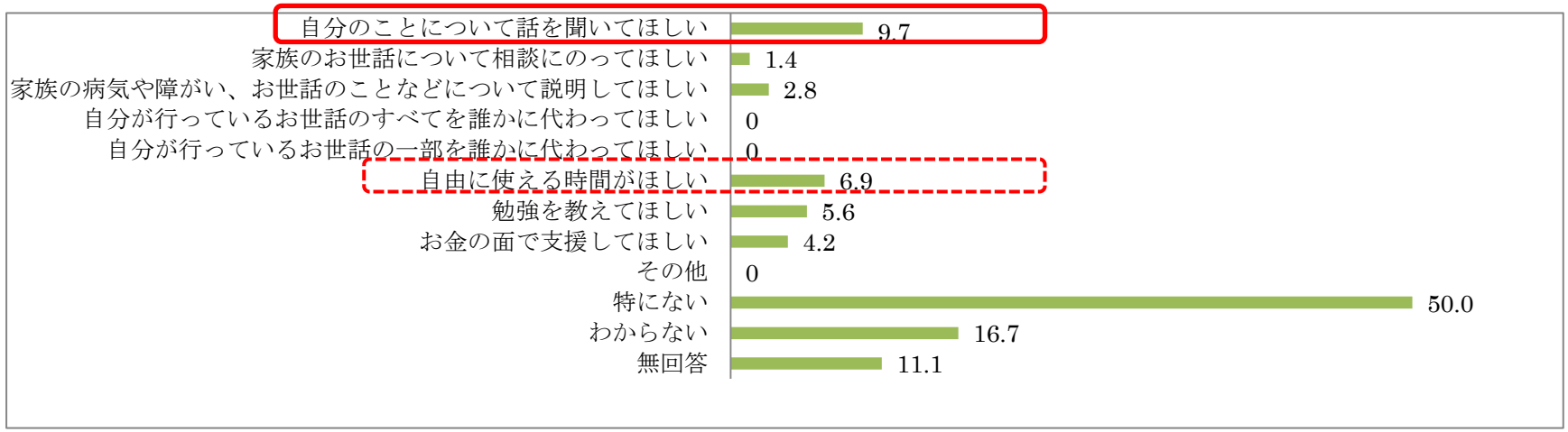
【中学生】

⑻　周囲に期待する支援

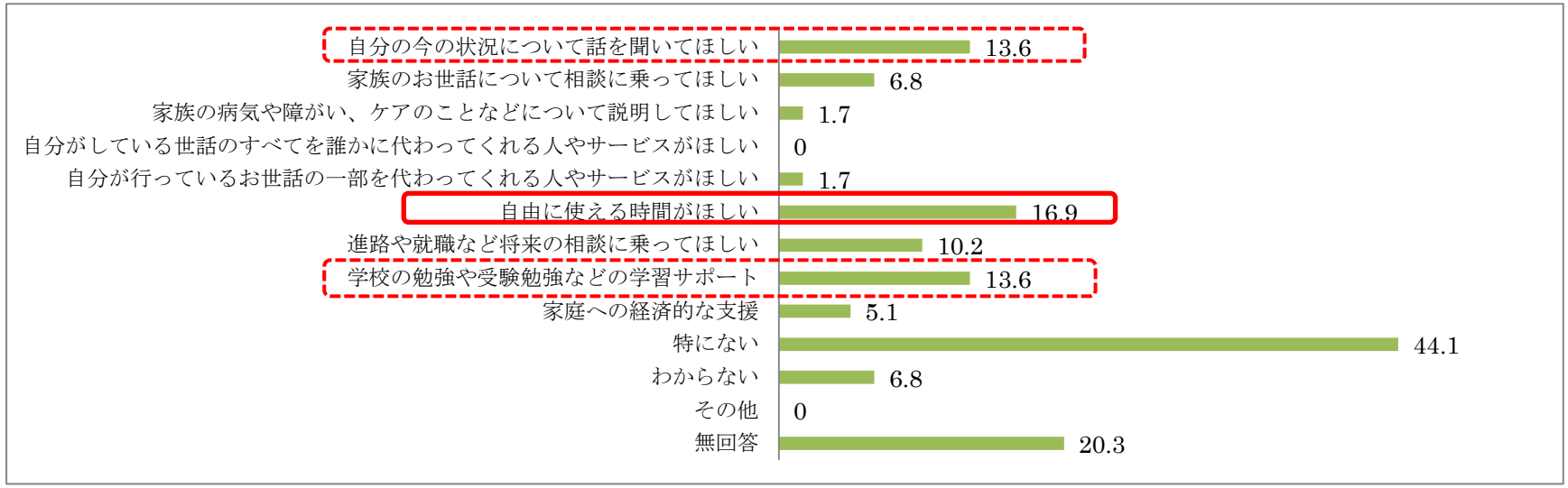
〇お世話をしている家族が「いる」との回答者に、学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援について質問

〇周囲に期待することとして、小中学生とも「特にない」が最も多いが、次いで、小学生では「自分のことについて話を聞いてほしい」、中学生では「自由に使える時間がほしい」が多くなっている。

【小学生】



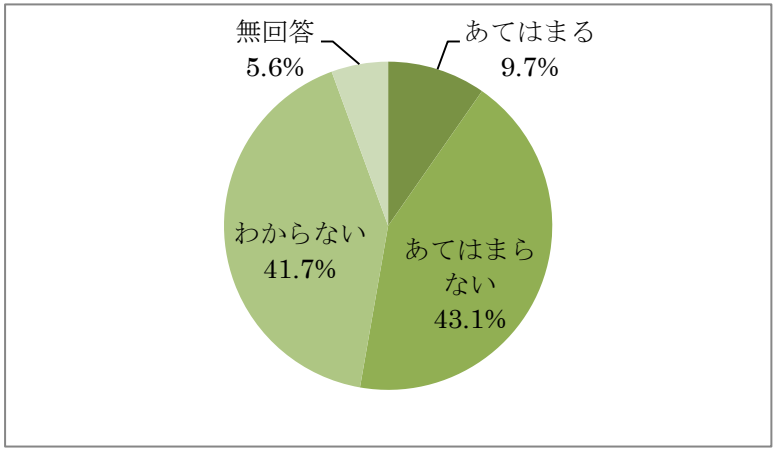
【中学生】



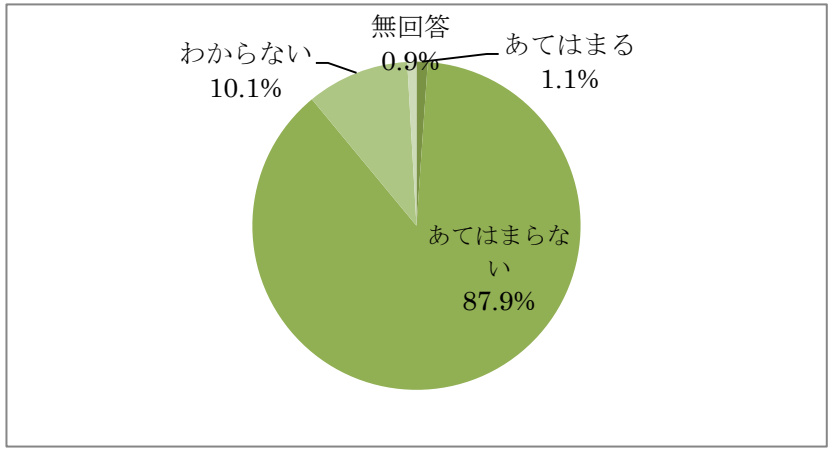
⑼　ヤングケアラーであることの自覚

○　自分がヤングケアラーだと自覚している人の割合は小学生が多いが、一方で「わからない」と回答している割合も高い。

【小学生】



【中学生】

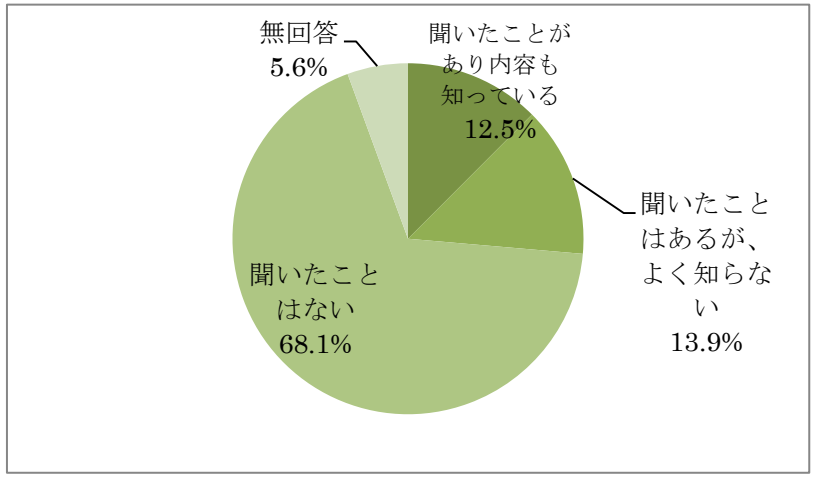


⑽　ヤングケアラーの認知度

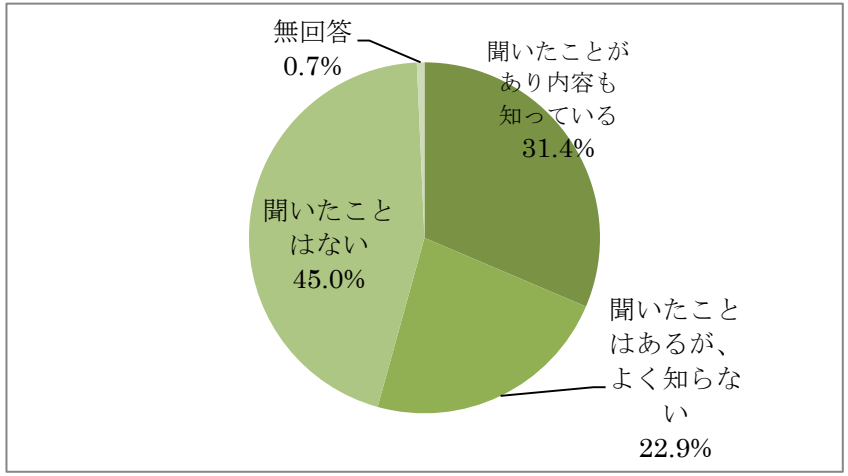
○　「ヤングケアラー」という言葉を「聞いたことがある」と回答したのは、小学生 26.4%、中学生 54.3%であり、年齢があがるにつれて認知度も高くなっている

○　県全体では小学生 25.0%、中学生 48.6%であり、市とほぼ同様の結果であった。

【小学生】



【中学生】



３　調査結果から（総括）

⑴　お世話をしている家族が「いる」と回答したのは、小学生で 12.6%、中学生で 6.7%であった。県全体では、小学生 11.6%、中学生 6.3%であり、県より高い割合となっている。また、お世話の頻度としては、「ほぼ毎日」が最も多く、年齢が低い時期から、家族の世話を日常的に担っている子どもが一定数いることがわかる。

⑵　お世話をしていることによる家や学校での生活に対する影響については、小中学生とも「特にない」が最も多いが、小学生では次いで「宿題など勉強する時間がない」であり、学校を休んでしまう児童もいることから、少なからず学業への影響がでていることが推察される。

⑶　周囲に期待する支援としては、小中学生とも「特にない」が最も多いが、次いで小学生は「自分のことについて話を聞いてほしい」であり、中学生でも３番目に「自分の今の状況について話を聞いてほしい」であった。
まずは、話を聞いてくれる身近な相談者の存在が重要である。どこに相談していいかわからないといったことがないよう、相談先、相談窓口の周知を図っていく必要もある。

⑷　ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがある」と回答したのは、小学生 26.4%、中学生で 54.3%であり、県全体では、小学生 25.0%、中学生 48.6%であった。年齢が上がるにつれて認知度も高くなっているが、ヤングケアラーだと自覚していない子どもも多いことから、今後もヤングケアラーの社会的認知度を高めていく必要がある。

⑸　ヤングケアラーは、家庭内のデリケートな問題であること、本人自身や家族がヤングケアラーだと自覚していないといったことから潜在化しやすい。また、ヤングケアラーの自覚のない子どもや、社会経験の乏しいヤングケアラーにとって、自ら公的な機関に相談する、支援制度につながることは難しいため、周囲の気づきが重要になってくる。
周囲の人が、ヤングケアラーかもしれないと気づき、まずはヤングケアラー本人や家族の思いを知り、寄り添い、見守り、ヤングケアラーやその家庭にあった支援につなげていく必要がある。